

「炭鉱と原爆の記憶」を考える

楠 田 剛 士

本特集は二〇一八年七月二八日に開催された第五六回原爆文学研究会で行ったワークショップ「炭鉱と原爆の記憶—文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える」の報告内容を記録するものである。まず司会者（企画者）から企画の背景を述べたい。

企画者は昨年（二〇一七年）刊行された川口隆行編『（原爆）を読む文化事典』（青弓社）において「炭鉱」という項目を担当した。この事典は原爆文学研究会の会員や関係者が多く執筆しており、「炭鉱」を書くにあたっては自分の研究だけではなく、研究会での議論や、会員である坂口博、茶園梨加、道場親信らの戦後文化運動研究を参照した。漫画『はだしのゲン』、上野英信のルポルタージュや詩、井上光晴、後藤みな子、韓水山の小説、樋口健二、熊谷博子の記録作品など、炭鉱を舞台として原爆（原発）体験が語られるテキストをできるだけ多く紹介することに努めた。これらのテキストには、原爆（原発）体験と炭鉱労働とを重ねて描くことで、書くこと・生きるこの意味を問い直すという特徴が見られる。しかし取り上げられなかった作品や問題も少な

くないと感じていた。

事典の他の項目に目を向ければ、国際、労働、遺構のトピックに炭鉱に通じる問題を見ることができると。たとえば「朝鮮戦争反対運動」（川口隆行）は、現在も朝鮮半島の分断、中国と台湾の対峙、沖縄の米軍基地問題があるため、「朝鮮特需」といった戦後日本のナショナルな記憶だけでは、朝鮮戦争は語ることができない」こと、文化運動と密接した同時代の原爆体験の表現も「朝鮮戦争との関わりから捉え直す必要がある」ことを述べている。炭鉱の問題に引き付けられれば、石炭ブームや採炭地の文化運動を考える際、東アジアの情勢と結びつけて考える必要がある。

「朝鮮半島と核危機」（高榮蘭）は、北朝鮮と韓国が朝鮮半島の核危機の起源に朝鮮戦争を位置付けることで、朝鮮人被爆者問題が見えにくくなることを指摘する。徴用工の被爆については「朝鮮人被爆者を／が語る」（黒川伊織）が詳しい。「労働」（川口隆行）では、国民徴用令により朝鮮半島の人々が「工場や鉱山などで過酷な労働に従事」させられたことに加え、「原子力発電所が下層



労働者の大量被曝という死を織り込んだ労働に依拠していること」から、生きるための労働が命を損なう苦役になっていく矛盾を見る。福島原発事故の復旧作業員に対するマスメディアの「英雄表象」についても、「事故の責任の所在から社会の関心をそらせ、事故以前から続く下請けや孫請けの原発労働者の被曝の実相を隠しかねない」と批判するが、前述の朝鮮戦争や、後述する遺構の語り方にも不可視化の問題が横たわっている。

核の労働問題や植民地主義との関係が東アジア地域に限らないことは「先住民権利運動」（松永京子）から分かる。ここでは「ウラン鉱山開発、核実験、核廃棄物誘致の問題は、政治や経済も絡んだ複雑な背景をも」ち、世界各地に存在するウラン鉱山は「植民地主義や差別に接続する」ことが論じられる。事典を書評した柿木伸之は「先住民の居住地域のウラン鉱山の坑道は九州の炭鉱に通じているのかもしれない」と述べるが（柿木伸之「（原爆）を読み継ぐことへの誘い」川口隆行編著『（原爆）を読む文化事典』書評）

「原爆の凶丸木美術館ニュース」一三三号、二〇一八年一月）、事実、下層労働者による坑内労働として炭鉱とウラン鉱山は共通し、エネルギー産業として石炭と原子力は共通する。エネルギー産業に従事する下層労働者の存在は世界的に存在するため、炭鉱と原爆（核）の問題はグローバルなものになる。

「原爆ドーム保存・遺産化論争」（山本昭宏）でも炭鉱が登場する。原爆ドームの世界遺産登録の過程で「アジア・太平洋戦争をめぐる各国の歴史認識の違い」が表面化したことを踏まえ、「近代化に関わる歴史的建造物について、何を・どのように残すのか」という問題は、もはや単一の国家の内部だけで議論することは



田 剛 士

きない」と述べ、軍艦島を含む「明治日本の産業革命遺産」の問題へと接続している。ここにも炭鉱と原爆をグローバルな視点でつなぐ眼差しがある。

司 会 このように原爆文学研究の蓄積から見出される炭鉱と原爆の交点には、《原

爆の使用が示唆された朝鮮戦争とそれに抵抗するサークル運動》、《エネルギー生産業における植民地主義》、《遺構の遺産化・観光地化》などがある。また、各項目は異なる話題を扱いつながりながら、戦後の経済発展や核産業によって見えにくくなった戦争や労働の記憶を今日の課題として再考する姿勢を共有している。この問題意識は炭鉱の記憶を論じる上でも重要になるに違いない。観光資源として見直される炭鉱が、技術的・経済的発展を遂げた近代日本の基幹産業として語られるのみでは、アジア・太平洋戦争の歴史や戦後の東アジアの文脈を覆い隠すことになるからだ。

炭鉱と原爆をめぐる問題をどのように掘り下げるか、他の問題へどのようにつなげて考えるか。そのことを多角的に検討するために本ワークショップを企画した。

報告者は、原爆の岡丸木美術館学芸員の岡村幸宣氏、炭鉱の文学・文化を専門とする奥村華子氏、文化社会学・地域社会学を専門とし軍艦島に関する著書がある木村至聖氏である。専門領域が異なる三名だが、それぞれの専門性を持ち寄って議論を拓いていくワークショップ（作業場）の意義に適ったメンバーである。報告の流れも、一九五〇年代の原爆表現と炭鉱の文化運動、一九六〇―七〇年代の朝鮮人被爆者や被爆証言の問題と閉山期を迎える



岡 村 幸 宣

炭鉱の問題、一九七四年に閉山し二〇一五年に世界遺産に登録された長崎・軍艦島の遺産化問題、としたことで、炭鉱と原爆の記憶を考える際の基本的な輪郭を示せたのではないかと思う。個別の報告はそれぞれご覧いただきたい。

いが、若干のコメントを付しておきたい。

岡村幸宣氏の報告は、一九五〇年代の「原爆の図展」と炭鉱文化運動の関わりについて論じる。氏は《「原爆の図」全国巡回―占領下、一〇〇万人が観た！》（新宿書房、二〇一五年一月）において、北海道と九州の炭鉱で「原爆の図展」が多く開催されたことを明らかにし、文化事典でも「『原爆の図』と全国巡回展」の項目を執筆している。今回の報告は展示を見た炭鉱の人々の感想文が中心になった。氏は「炭鉱」と「原爆（核）」を当時どのように結びつけて考えられたかが伝わる炭鉱関係者の感想」や、「炭鉱」と「原爆」を結びつけ、本質を可視化させる視点」は「見当たらない」とする。もつともこれは報告以前から予感されていたように、論のはじめに「限られた資料から可視化できない」という現状から「私たちに必要なのは、可視化されたものの先にある、いまだ形になりきれない思考の痕跡を読み解く想像力なのかもしれない」と述べている。

結論部では、全体討論のなかで言及された、原爆と花岡事件をつなぐ想像力について課題が示される。今後の調査報告を俟たない。討論では他に、「カラス」を描く丸木位里・丸木俊夫妻に戦前の朝鮮人が意識されていたかという質問があり、それに対して



報告 奥村 華子

朝鮮人に対する関心は戦前から持続しているが、長岡弘芳、布川徹郎、朴壽南らとの関わりから学んだのではないかとこの応答があった。また、松谷みよ子『日本の民話』に山本作兵衛が語った二編が収録されているが、シリーズの挿絵を担当した丸木夫妻は炭鉱を描いていないことから、夫妻のなかで炭鉱と原爆はつながっていないのだからという応答があった。

丸木夫妻において炭鉱と原爆は直ちにつながるものではないが、いま興味深いのは岡村氏が丸木美術館の学芸員の仕事の中で炭鉱との関わりを持つている点である。二〇一三年に丸木美術館で山本作兵衛展が開催され（山本作兵衛の炭坑記録画や日記など六九七点が二〇一一年に世界記憶遺産に登録された）、氏はコロナ・ブックス編集部編『山本作兵衛と炭鉱の記録』（平凡社、二〇一四年一二月）にも寄稿している。同書で加藤恭平の写真について「戦時期の炭鉱にも垣間見える人間の普遍的な営み」をとらえたものと解説するが、これは「原爆という人類史上に残る惨禍を通して、いつの時代にも通じる「命」の問題を描いている」という「原爆の図」の普遍性の評価にも通じる（『原爆の図』のある美術館―丸木位里、丸木俊の世界を伝える』岩波ブックレット、二〇一七年四月、六二頁）。また、『非核芸術案内―核はどう描かれてきたか』（岩波ブックレット、二〇一三年一二月）では、「原爆の図」第一四部と韓水山との関係や、筑豊や北海道の炭鉱の写真でデビューしチェルノブイリに足を運んだ本橋成一について触れている。これらも



報告 木村 至聖

炭鉱と原爆を結ぶ想像力の実践ともいえるだろう。限られた資料から不可視化されたものの記憶をどのように読み解くのかという岡村氏の問いかけに応じるように、奥村華子氏は雑誌「辺境」を題材に、炭鉱と原爆の問題が交わる朝鮮人被爆者について論じる。明快な内容をあえて要約すれば、以下のようになる。①井上光晴が編集した「辺境」には、一九七〇年代の原爆と炭鉱を問題化する記事や、在日朝鮮人被爆者の問題に結びつく記事がある。②「辺境」掲載の重田雅彦と平岡敬の記事では、在韓被爆者の証言が日本の加害責任を追究するものとして位置付けられている。③朴壽南は『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』では自身のルーツを辿る行為として聞き取りを行うが、「途上の夢」では証言をコラージュする。④このコラージュの方法は証言のもつ真実性を危うくするが、証言を詩的言語として再構成することにより、証言できない者・物の痕跡を浮かび上がらせる。

報告では朴の「かつての朝鮮人労働者の「証言」と「証言」に至ることのない声を、同様に書き取ろうとする」手法が丁寧に分析された。全体討論における氏のコメントでは、炭鉱労働のインターナショナル性、絵や遺構など物質の持つ力の強さ、慰霊碑や記念碑といった後から建てられるものをどう考えるか、などを話題にされた。

一九七〇年代の朴の試みは、「可視化されたものの先にある、いまだ形になりきれない思考の痕跡を読み解く想像力」（岡村氏）

として再評価できよう。朴壽南については最近の原爆文学研究会でも安ミンフアが映画『もうひとつのヒロシマ アリランのうた』が被爆者の身体と原爆スラムの類似性を強調すると論じている（『原爆文学研究会報』第五五号参照）。この映画の手法は、「姿を消そうとするものたち」を「つなぎ合わせ」「痕跡を見出そうとする」、「途上の夢」の手法に連なる。なお、朴壽南『もうひとつのヒロシマ―朝鮮人韓国人被爆者の証言』（舎廊房出版部、一九八二年八月、第一版第一刷）の表紙には「原爆の凶」第一四部が使用されており、「カラス伝承」の一例としても興味深い（前掲「朝鮮人被爆者を」が語る）。

一九七〇年代から消えていった炭鉱は、廃墟ブームを経て、いま近代化遺産として脚光を浴びている。木村至聖氏の報告は軍艦島の遺産登録をめぐる問題から始まり、遺構が喚起する（想像力）の重要性を論じるものである。これもポイントをまとめれば、①韓国からの登録反対をうけ、日本側は一九一〇年までで区切るが、それは軍艦島の多面的な魅力を切り詰めてしまった。②文化遺産を正／負に区分することも、文化遺産の多面的価値を矮小化しかねない。③長崎の場合も、観光文化資源としての炭鉱と原爆が単なる物語として語られれば、歴史の複雑さが平板化する恐れがある。④過去への（想像力）は人を過去の出来事に有機的に結び付け、考えを深めさせたり豊かなリアリティを表したりする。⑤文化遺産は遺構に特定の意味付けを与える制度であり、世界遺産化された軍艦島は意味が切り詰められたが、遺構はそれを乗り越える（想像力）も喚起する。

多面的な価値や魅力を切り詰めずに語ることの難しさは、原爆

体験を語る場合にも当てはまる。全体討議において、木村氏は有名な人気ガイドほど語りが定型化していると述べたが、本研究会でも被爆の語りの定型化はたびたび議論されてきた。事典の「語り部」（茶園梨加）の項目を参照すれば、被爆体験の多様性や重要性は、語り部と聞き手の共同作業によってもたらされるということが、その共同作業には過去への（想像力）が不可欠である。

全体討論で木村氏は、原爆・原発とつながる災害として、三池炭鉱三川坑で起きた炭塵爆発事故（一九六三年）に伴うCO中毒という目に見えない被害を例示された。会場からは、長崎市内にある岡まさはる記念館の位置付け、軍艦島に大量に投下される資本とテクノロジ、映画『家族』（一九七〇年、山田洋次監督）が長崎の伊王島炭鉱から始まることなどが話題に上がった。木村氏が調査しているという台湾の炭鉱は日本の企業や技術が関わるが、原発も同じ関わり方をしている（李文茹「台湾民主化と反核」）。

以上、各報告は「文化運動」「被爆朝鮮人」「遺構」という異なる視点だったが、結論部では重なりが見られた。木村氏は「一見異なるトピックに属する遺構どうしを相互に関連づけること、それはつまりその遺構が喚起する（想像力）どうしをさらに（想像力）によって架橋していくこと」の重要性を述べたが、奥村氏の報告も「自身の身体が喚起する、直接的なつながりのない「証言」同士をつなぐ」朴壽南の方法に注目にするものであった。岡村氏が最後に触れた長崎の潜龍炭鉱のように資料が残されていない巡回展についても、北海道の事例・記録から考えてみることは、木村氏のいう（想像力）を働かせることである。

全体討論では、国際的な視野で炭鉱と原爆をつなげる意見が多

く寄せられた。例えば、ヒンディー語の小説のなかでウラン採掘と炭鉱の被害が別々に描かれているという紹介。五〇年代の日本と第二次世界大戦後のウエールズの産炭地帯がどのような問題を共有し異なっているのかという問いかけ。映画『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』（一九八五年、森崎東監督）において原発の流動労働者が動くという風俗産業の女性たち（フィリピンから来た女性も含む）も動くという指摘。映画『博士の異常な愛情』（一九六四年、スタンリー・キューブリック監督）において炭鉱に核シエルターを作る話があるというコメントなどである。

これらは司会者の力不足で十分に議論を尽くせなかった。今後の課題としたいが、最後に少し研究展望を述べれば、ひとつはやはり具体的な作品の考察が考えられる。文化事典の項目「外国人記者の被爆地ルポ」（永川とも子）のなかでジョージ・ウエラーのルポが触れられている。被爆地長崎の状況と産炭地大牟田の捕虜収容所における過酷な炭鉱労働を伝える、まさに炭鉱と原爆の書である（ジョージ・ウエラー著、アンソニー・ウエラー編、小西紀嗣訳『ナガサキ昭和20年夏―GHQが封印した幻の潜入ルポ』毎日新聞社、二〇〇七年七月）。NHKドラマ『だから荒野』（二〇一五年）は桐野夏生の小説を原作とするが、ドラマの最後に、被爆者の老人を世話する青年がかつて炭鉱があつた池島出身だったという、小説にはない場面がある。これらを詳しく論じる紙幅はないが、個々の作品の、個々の文脈に即した考察を蓄積していくなかで、炭鉱と原爆の新たな交点が見つけれられるかもしれない。

もうひとつ考えるのは、隣接分野との研究交流である。炭鉱ガイドにおける語りの定型化を考えると、原爆の研究手法や成果

が参照できるのではないかと考えるが、炭鉱研究から原爆文学研究が学ぶことも多いだろう。最近刊行された中澤秀雄・嶋崎尚子編著『炭鉱と「日本の奇跡」―石炭の多面性を掘り起こす』（青弓社、二〇一八年七月）は社会学、経済史、地理学の研究者による論集である。木村氏も国内外の炭鉱の遺産化に関する論文を寄せており、共同研究の良質な成果になっている。ワークシヨップで言及できなかった家族・女性は、原爆文学を読んだり論じたりする際にも論点になるはずだ。

ただしこの本で気になる点がないわけではない。序章の注の記述に、「中小炭鉱が多かった筑豊では「炭坑」と表記することが多く、ここから上野英信・谷川雁・森崎和江らの影響を受けた文学畑ではいまでも「炭坑」を使う論者がいる。しかし、石炭産業全体として戦後は、「坑」の字は一つの炭坑のなかに複数ある作業単位としての「坑」（略）を表記するものとして用いる」（二二頁）とある。全体から見れば些細な記述なのだが、それゆえ余計に「文学畑」という括り方には社会学と文学とが相容れないものとする視線が感じられるのだ。実際は相互の交通は重要なはずで、論集自身も後書きで「石炭とそれをめぐる人間の営みは多様な相貌をもっており、時間をかけて他分野の手も借りながら総合的に解明するしかない」と述べている。炭鉱の研究と原爆（文学）の研究が精緻になればなるほど、炭鉱研究の成果を原爆（文学）研究に持ち込み、原爆（文学）研究の成果を炭鉱研究に持ち込むという研究の架橋が今後いっそう重要になるだろう。本ワークショップがひとつの交点となつて、さらに研究や議論が広がっていくことを期待したい。